

四高のきのこムラージュ第2報

皮膚ムラージュの祖土肥慶蔵ときのこムラージュの達人山越長七郎

Follow-up report of mystery of fungi moulages used in Japan 4th senior high school
Shi-ko - skin moulage by Keizo Doi and fungus moulage by Chousichirou Yamakoshi

河原 栄¹⁾、佐久間大輔²⁾、加藤 克³⁾、赤石 大輔⁴⁾、古畑 徹⁵⁾

KAWAHARA, Ei SAKUMA, Daisuke KATO, Masaru AKAISHI, Daisuke FURUHATA, Toru

1) 金沢大学医薬保健研究域保健学系、2) 大阪市立自然史博物館

3) 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

4) 能登半島里山里海自然学校、5) 金沢大学資料館

昨年度の金沢大学資料館紀要¹⁾で、自然科学研究科の新校舎への移転に際して四高時代のきのこの蠟模型が発見され、角間の里記念館を経て金沢大学資料館に移管されることになった経緯を書いた。そして、蠟模型の多くが当時の皮膚科で教育用に作られた皮膚ムラージュと同様の技法で作られていること、東京大学医学部にも同じ標本が保存されていたこと、金沢大学への導入者はドクササコの新種記載を行った事で知られる理学部の市村塘であることが明らかになった。しかし、蠟模型の制作者と、それに続く金沢大学への流入経路が謎として残った。今回、引き続き全国的な調査を継続した中で、民間の教育標本制作者である山越長七郎が中心人物として浮かび上がり、東京大学医学部と密な接触があったことに加え、東大と四高のきのこ蠟模型の製作者であったことが明らかになったので、ここに報告する。

資料館特別展示

昨年度の紀要での発表後、きのこの蠟模型30点を4月から公開・特別展示することになった。この特別展に向けて準備をする中でいくつかの新たな事実が掘り起こされた。一つはさらに新しいきのこ標本が生態学講座から見つかったことである。「アフギタケ」との表記があり、その形態から、現代でも同じ和名の「オウギタケ *Gomphidius roseus*」と同定され、資料館に追加移管された。その写真は既に「金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアム・プロジェクト」²⁾で公開されている。もう一つは模型に付されていた番号に関する情報である。2種の番号のうち、前回の論文で備品番号と想像された一連の番号、例えばキツネノエフデに対して「植16ノ3」と書かれた番号は生物学教室特有の備品番号と考えられた。四高全体の備品番号は2-3桁の数字が三つ並ぶ方式であったのに、ある物理実験機器に対して「重068ロ」の番号が台帳に記入されていたからであり、同じ方式のこれらの番号はそれぞれの部署特有の備品番号と推定された。さらに、附属図書館の特別資料室に保存してあった資料中から、新たに教育用のきのこの掛図と市村塘のきのこの講義の詳細なノートが資料館の堀井雅弘により発掘された。掛図が1911年に取得されたとの記載がある帳簿³⁾も残

されていた。

「オウギタケ」の1標本を加えた資料館に移管されたきのこ模型のすべて31点に加え、きのこの掛図ときのこの講義の詳細なノートが、2011年4月7日から5月31日に特別展示「四高旧蔵キノコのムラージュ標本」で公開された。

北海道大学の標本

資料館長の古畑徹は、さらに広く情報を得るためにも同年6月に名古屋で開かれた博物科学会で発表した⁴⁾。すると、その場で北海道大学植物園・博物館の加藤克から、「北大にも同じものと思われるきのこ標本が存在する」とのコメントがあった。この情報を加えて、10月に札幌で開かれた日本菌学会で赤石が発表した⁵⁾。そして短時間ではあるが、日本菌学会の期間中に佐久間が北海道大学の標本を実地調査した。

これらを踏まえて、北海道大学の加藤からさらに大きい情報が得られた。北大の48点の模型のリストである。提供されたままの名前をそのまますべて以下に記す。シロキクラゲ、ツキヨタケ、ヤナギタケ、アカジカウ、ベニタケ、クギタケ、キツネノチャブクロ、オオキツネノチャブクロ、スッポンタケ、ショウロ、ツマミタケ、イグチsp.、アカハツ、ベニソウメンタケ、シシタケ、アカヤマタケ、アンズタケ、キソウメンタケ、ドクスギタケ(アセタケ)、イッポンシメジ、マツタケ、シロシメジ、キテングタケ、キクラゲ、ナラタケ、ハツタケ、アワタケ、アンズタケ、ユキワリ、タマゴテングタケモドキ、エノキダケ、ホコリタケ、ウスタケ、ホンシメジ、アブラシメジ、タマゴタケ、タマゴテングタケ、マルアミガサダケ、テングタケ、サンゴタケ、アカカゴタケ科sp.、キツネノエフデであり、それに加えて、キノコとのみの表記が6個あった。

次いで、このリストと金沢大学のリスト(文献1の表を手直しして表1に再掲載)と比べると、同じ種類の標本は16種類あった。ユキワリ、ナラタケ、エノキダケ、タマゴテングタケ、タマゴタケ、シロシメジ、アブラシメジ、アハタケ、アカジカウ、アンズタケ、オオキツネノチャブクロ、キツネノエフデ、サンゴタケ、シシタケ、ツマミタケ、タマゴテングタケである。さらに重要なことは、多くの標本に金沢大学と東京大学と同じ菱形のラベルが添付してあったことである。これらのラベルの番号のうち、北海道大学の47(図1A)は「エノキダケ」と記され、金沢大学の■7^{註1}の「エノキダケ」^{註2}(図1B)と形態が酷似していた。このことは金沢大学の17番の「イロガワリ」(図2A)が東京大学の「イロガワリタケ」(図2B)と同一の番号の17(図2B挿入図)であった事実と一致する。従って、金沢大学、東京大学、北海道大学の3大学の模型が同一の起源であり、少なくとも一部は同じ石膏の型から作られた模型とすることができる。さらに、3大学に共通のラベルはこの菱形のものであり、最古のラベルと考えなければならない。加藤はこのラベルに関して、「北海道大学の標本は農学部由来で、東京大学と異なり、医学部と薬学部は全く接点がなく、おそらく業者から買ったものであり、東京大学の標本も金沢大学の標本も同じ業者からのものであろう。」とし、この番号を製作者が付与した種番号のラベルであると仮定した。

註1. ■は判読不明だったことを示す。

註2. 前回の稿では我々が新しく同定したきのこ名を用いたが、混乱を避けるため今回の稿では、きのこの名はできるだけ模型制作者あるいは監修者が同定した元々の名前を使用する。但し、仮名遣いは現代風に変更する。

関西の教育標本作製業者

この仮定により、当時のきのこ標本作製業者に関する調査が始まり、古くからきのこの蠟模型を販売していることがよく知られていた島津製作所の模型について、佐久間による聞き取り調査と目録の調査が行われた^{6, 7)}。その目録の図から判定すると、蕨類付きの台座もきのこ模型も似てはいるものの、金沢大学の標本と同一とは思えなかった。また、島津製作所のキノコ模型の制作者の孫に当たる人物に聞き取り調査を行ったが、金沢大学の標本と同じという証言は得られなかった。また、金沢大学の附属図書館の特別資料室からは大阪の稲垣製作所⁸⁾でもきのこ標本を販売していたとの資料が見つかったが、より詳細な調査は行われなかった。

山越長七郎

次いで、北海道大学の加藤は他の案件の資料を探している際に、偶然、国立国会図書館の近代デジタルライブラリー⁹⁾の博物学標本目録からきのこ蠟模型に関する二つの目録を発見した。一つは1933年の島津製作所標本部の「初頭教育博物学標本目録」¹⁰⁾であり、もう一つは1936年の山越工作所の「博物学標本目録」¹¹⁾であった。山越工作所のきのこ標本の目録には金沢大学と東京大学の公開標本の名前がすべてはいっていた。尚、現在教育用機械を作っている同名の山越製作所が東京に存在するが、1983年の日本科学標本協会の25周年記念誌の対談集の中では全く関係のない会社とある¹²⁾。

山越工作所の目録の前文にある、山越長七郎が昭和2年10月に受章した産業貿易功労者彰績碌抜粹を以下に原文のまま記す¹¹⁾。

氏は従来我国に於いて用ひられし各種理化学、模型類が主として歐米より輸入せられたるを見て、之等の製作を試みんと企て、先づ之に關する知識を修得するの必要を感じ、明治三十五年東京帝國大學解剖學教室に學び、次で京都帝國大學に入れり。さらに同四十二年歐洲に渡りて獨逸、佛蘭西、英吉利等の各大學ならびに理化学器械製作所に見學をなし、其翌年には奧太利に傳じて維納大學に蠟製模型の制作方法を修め、同年末に帰朝したり。

爾來其蘊蓄せる學理及技術を應用して各種の保健衛生及博物に關する模型を製作し、内外各地の博覽會及展覽會等に出品したるが、何れも賞讃を博して授賞せられざるなく、又官公署、學校及公私病院より命ぜられ、各種模型を製作して納入したる事枚擧に遑あらず。斯くて我國に於て使用せらるる生理、解剖學上に關する模型類は歐米各國よりの輸入は全く其跡を斷つに至れり。斯くの如き結果を納めたるは全く氏の絶えざる努力に依るものにして全國各學校、病院、研究所等に於て用ふる生理、衛生、博物に關する模型の大半が同氏の製作品たるに徴するも、氏が之等の製作に如何に専念せしかを窺ふに足るべし。

ここに記載されている山越長七郎の標本作製技術修得の歴史の足跡は、皮膚ムラージュの技術を日本に導入した土肥慶蔵(1866-1931)の足跡と一致する。土肥慶蔵は1894-1896年にウィーン大学のMoritz Kaposi教授(1837-1902)の下で皮膚科学を学んだ。そして、Carl Henning(1860-1917)の指導下に2つのムラージュを1896年に完成させ、1898年に帰国して東京帝国大学医科大学の皮膚科梅毒学講座の主任教授となった¹⁾。これに対して、山越長七郎がきのこの蠟標本の作製法を修得するために東京大学解剖学教室に入門したのが、土肥慶蔵が東京大学に戻ったわずか4年後の

1902年である。そして、1909年にドイツ、フランスとイギリスの各大学に修行にでかけ、1910年には土肥慶蔵がムラージュを学んだウーン大学で蠟標本の作製法を修得して同年末に帰国したとある。

18世紀のヨーロッパ諸国は、科学としての人体解剖学が頂点を極めており、解剖学者と蠟細工製作者とが協力して人体解剖の精密な蠟細工を多数製作していた。現在でも有名な施設として、18世紀末に設立されたイタリアのLa Specola動物学博物館（現在フィレッツェ大学自然史博物館動物部門¹³⁾）があり、ロンドンでは1835年に蠟人形館が作られた。また、Carl Henningがムラージュ技法習得のために派遣されたパリのSaint Louis 病院には、Jules Baretta (1834-1923) が作成した多数のムラージュ標本が保存されている¹⁴⁾。1890年代にはこのムラージュがドイツ語圏の各大学に広まったようである¹⁵⁾。山越長七郎は蠟模型の先進地であるこの地域の大学や病院を見学して回ったのだろう。そして最も重要なことは、この一連のヨーロッパ旅行の最後の1年に、ウーン大学で蠟標本の作製法を修得して帰国したことである。このウーン大学で修行した1910年には、土肥慶蔵が1年間のヨーロッパ旅行に出かけたとの記録が残されている¹⁶⁾。おそらく、山越長七郎はこの時に土肥慶蔵から紹介されて、ウーン大学のHenningからムラージュ技法を学んだのだろう。

山越長七郎がムラージュ技法にたどり着いて蠟模型標本作成技術を修得するために、1902-1903年、1909-1910年と約4年もの年月をかけている。ムラージュ技法はただ石膏で型どりするだけではなく、繊細な着色などの工程があり、高度の技術が必要であるためと思われる。また、努力のみならず、美術的才能が必要であり、その頃に名声を博したムラージュ標本の製作者は皆この才能を持っていた。Jules Barettaは精巧な果物の紙細工（papille-mache）をパリの小街路で売っていた時に、Saint Louis病院の皮膚科医Charles Lailier (1828-1898) に見い出された¹⁵⁾。そして、1889年のパリのこの病院で催された第1回皮膚科学・梅毒学国際会議に皮膚ムラージュを出品して世界の参加者から賞賛された。Jules Barettaは後にレジオン・ドヌール勲章のシュヴァリエ十字章を贈られている。また、ウーン大学のHenningは単に医師であるばかりではなく、傑出した医学イラストレーターであった。そのため彼は、Moritz Kaposi 教授に選ばれて、Saint Louis病院にムラージュ技法修得のために派遣された。Henningはその後もばらムラージュ製作者として活躍し、1892年に第2回皮膚科学・梅毒学国際会議がウーンで開催された際に作品を出展した。さらに、土肥慶蔵がムラージュの技術を伝えた東京大学の伊藤有は、土肥慶蔵の出身地福井県の武生での幼なじみであり、東京に出て亀井至に師事して洋画の修行を積んでいた。伊藤は土肥に懇願されて東京帝国大学医科大学蠟工技術主任の職についた^{14, 17)}。そして、多数のすばらしい皮膚ムラージュを作製して、1910年のロンドンにおける日英博覧会で名誉大賞を得ている。現在、金沢大学にある伊藤有作製の標本を見て、金沢大学で作製された標本と比べてみると、若干の質の差を感じることができる。このように、きのこにおいても秀逸な模型を作製するためには、才能と良い師と長い修練期間のすべてが必要だったのだろう。

山越工作所の目録と各大学の標本の比較

山越工作所の目録に載っているきのこ模型の写真と各大学のきのこ模型の標本の形態を比較する。目録の「いろがわり」は金沢大学と東京大学のそれと酷似している（図2A-C）。また、目録の「べにてんぐたけ」は東京大学の形態と酷似しているのみならず、きのこの周囲に巻き付いている笹ま

で同じである(図3A. 標本)。ここまでで、3大学のきのこの蠟模型は山越長七郎が作製したものとほぼ断定できるが、さらに踏み込めば、この二つのきのこ模型の主要部分は同一の石膏型を用いたムラージュと考えられる。

しかし、北海道大学の現在のリストには山越のリストにはない20点のきのこの名前があった。また、「イグチsp」等の種を特定できない意の名前が多くあった。この点に関して現在の北海道大学のリストができあがった経緯を付け加える。

上述した北海道大学のきのこ模型のリストは、現時点における博物館資料台帳から加藤が抽出したものである。北海道大学所蔵きのこ模型には、ガラスケースにきのこの名称が記載されたラベルが貼り付けられているもの、貼り付けられていないものが混在している。植物園では、ケースのラベルの名称に基づいて管理を行ってきたが、このラベル自体は金沢大学と東京大学の模型には付属しておらず、北海道大学での管理の中で付与されたものと考えられる。これにより、山越のリストと資料管理台帳との間で、資料名の齟齬が生じた可能性が考えられる。

加えて、次のような改変も生じている。北海道大学植物園では、標本登録時にラベルが貼り付けられておらず、形状からも名称が明らかにならなかったものは、「きのこ」模型として登録されてきた。また、場合によってはガラスケースと標本自体とが分離したことで、ラベルが付与されている資料であっても誤った名称で登録されている可能性があった。植物園では、これらの問題点を改善するため、2003年に北海道大学総合博物館で開催された「きのこの自然史」展に資料を貸し出すにあたって、担当者であった小林孝人氏に改めて同定を依頼し、その結果に基づいて、資料名を修正した。上述リストには、この修正も反映されているため、山越リストと合致しない部分が生じているのである。

前回も触れたように同様のことが東大の「イロガワリタケ」にも言える。「イロガワリタケ」は1959年から1989年頃に一時的に使われた名前^{1, 18)}であり、本来の「いろがわり」をこの時期に「イロガワリタケ」に変更したのだろう。金沢大学では幸いにして、きのこ名を更新した形跡はなかった。さらには、本来のラベルが一部に残されていた。黒枠がついた長方形のラベル(図4)である。先に最古番号ラベルが菱形の黒枠付きラベルと結論したが、同一の黒枠がある長方形のラベルも同時期のラベルと考えられる。この長方形のラベルが多くの台座に貼り付けてあったが、読み取れるのは「どくつるたけ *Amanita virosa*」と「あんずたけ」「ならたけ *Armillaria melea*」の3標本のみだった(金沢大学資料館デジタル・アーカイブ²⁾参照)。これらは山越の目録録に載っているのと同じ名前で、しかも「ひらがな」だった。その他のラベルのきのこ名は後に書かれた名前と考えられるが、いくつかでは複数のラベルが残っていて、しかもすべての名前が山越のラベルと一致したので、そのまま書き写す作業を何回か繰り返したのだろう。

昨年、我々は浅はかにも拙い学識で名前を更新して、元の名前とともに現代の種として表中に記した。もし仮に、金沢大学でもきのこ名が更新されていたとすると、山越長七郎にたどり着くまでにもっと長い時間がかかったかもしれないことを考えると、古い資料は情報全体をあるがままに保存されるべきことを、改めて考えさせられる。

川村清一

山越工作所の目録から得られた新たな重要情報は、川村清一(1881-1946)が監修者だったことである。川村清一は1954年に発刊された全8巻の大部「原色日本菌類図鑑」¹⁹⁾により、現在でも

最も有名な菌類学者の一人であるが、1906年に東京帝国大学理科大学を卒業、1908年に農務省山林局林業試験場に勤務し、1914年に千葉県立園芸学校（現千葉大学農学部）に移り、1917年に同校の教授となった、氏は比較的若くから日本を代表する菌類学者としていくつかの図鑑を著していた。1912-1915年にはフォリオ版の「日本菌類図譜」をしたためた。そして1929年には、原色版「日本菌類図説」を完成し、それは当時のきのこ研究者や愛好家の座右の書となった²⁰⁾。

ここで、現在でも比較的容易に入手できる「原色日本菌類図鑑」を用いて、山越工作所のリストにある70種のきのこを検索すると、ほぼすべての68種が掲載されていた。それらのきのこの和名はおそらく勘違いからと思われる「さんごたけ」と「おにくすべ」以外はすべて一致した。当時の川村清一の時代の種名と現代の種名が異なっているものが多くあり、現代ではどれを指しているのかわからずもないものもいくつかある。川村清一の「コベニタケ」や「イロガワリ」は、現代では、もうどのきのこを指していたのかが不明になっている²¹⁾。また、「キテングタケ」は現代では「ベニテングタケ」と区別しないが、川村の図鑑には別種として図が記載されている¹⁹⁾。このことを考えると、3大学のきのこ模型に関して、山越工作所の目録からのみならず、川村清一の図鑑より様々な情報が得られることになる。

但し、山越工作所の目録には川村の図鑑と異なる明らかな誤りが二つある。「さんごたけ」と「おにくすべ」である。現代でもサンコタケをサンゴタケと誤って呼ばれることはしばしばであるが、異様な形とオレンジ色²⁾からサンゴと思い込んでしまうのであろう。しかし、サンコタケは三鈷茸と記され¹⁸⁾、平安時代以後の密教で用いられる法具の三鈷の形を表す。尚、1937年に小林義雄が記載したサンゴタケ *Holtermannia collaroides* Kobayashi²²⁾ は科が異なって、形態も全く異なるきのこである。オニフスベは鬼瘤であり¹⁸⁾、単なる聞き取り違いと思われるが、鬼燻（燻）と勘違いしたのかもしれない。

ムラージュと非ムラージュ

前回の報告で、ほぼすべてのきのこ蠟模型がムラージュとして、「マイタケ」と「ハナホウキタケ」が少なくともムラージュではないとした。形が実際のキノコの形からデフォルメされていたからである。そして、その原図を江戸時代末期の坂本浩然の絵に求めた。しかし、今回川村の「原色日本菌類図鑑」の図を見ると、「マイタケ」の模型の形とよく似ていた（図5）。そうすると、川村の監修の元に川村の図をまねて作った可能性がある。そのように考えて、キヌガサタケを見てみると、東京大学の「キヌガサタケ」の蠟模型と川村の図鑑の「キヌガサタケ」の形がよく似ていた（図6）。これに対して、東京大学の「ベニテングタケ」の模型と図鑑の形は似ていなかった。この事実は、ひだを有する傘と絵がある典型的なシメジ型のきのこは、ムラージュ製法で作られていることを示しているものだろう。なぜならば、ムラージュ技法で作られたキノコ模型は、新鮮なキノコを型どるので、図鑑に描かれたキノコとは異なっているのだと推測できるからである。対して、「マイタケ」や「キヌガサタケ」などでは、対象の半分を型どりするムラージュ技法は適用できない。これらのキノコの蠟模型は、川村が描いた図を模写して作ったものであろうと推測する。また、蠟模型標本を詳細に観察すると、「シモフリシメジ」や「タマゴテングタケ」などのシメジ型の傘と柄の接合部は、容易に分離することができるように見える。また、「キツネノエフデ」や「サンコタケ」などの腹菌類では全体が一体となっていた。金沢大学の個々の蠟模型に対してムラージュか否かを表1中に記したが、31標本中21標本がムラージュと考えられた。

市村塘

前回、きのこ蠟標本の導入者は四高理学部の市村塘（1872-1945）と結論し、ドクササコ中毒を通じた金沢医科大学との関係、皮膚ムラージュに関する金沢医科大学皮膚科の初代教授土肥章司（1876-1969）と東京大学の土肥慶蔵との関係について考察した。しかし今回、金沢大学のきのこの蠟模型が山越製作所から購入したことが明らかになったからには、北海道大学と同様に金沢医科大学の関与はなくてもよい状況にある。しかし、市村塘に関してさらに調査を進めると、金沢医科大学の非常勤講師であり²³⁾、医科大学との密接な交流があったことが判明した。そして、土肥慶蔵がきのこムラージュに直接関係していたことを考えると、きのこムラージュの情報は、土肥慶蔵の息子であり金沢大学への皮膚ムラージュ導入者である金沢医科大学初代皮膚科教授土肥章司から得た可能性が捨てきれない。また、東京大学医科大学は教育用のきのこ模型を買う必然性はなく、山越長七郎からの寄付と推定される。

きのこ模型が作られた年代

前回、きのこの蠟模型の作製年代は1905年から1920年と推測した。しかし、製作者と監修者が分かった今、より正確な年代の推定が可能である。少なくとも山越長七郎がムラージュの技法を修得して日本に帰った1910年より後でなければならないし、現在残っている山越工作所の目録が発行された1931年より前でなければならない。従って、1911年から1930年の間に製作したことは確実である。監修者の川村清一のことを考えても、最初に一連の図譜をしたためた1915年が一つの目安であり、日本菌類図説を発表した1929年がもう一つの目安である。そして、川村清一が金沢大学にあるきのこ模型と同じ種のキノコを最初に誌上発表した年^{18, 22, 24)}を表に記したが、大部分が1915年までに終わっているので、やはりこの年が一つの目安である。1929年の日本菌類図説で初めて発表されたきのこもいくつかあるが、教育標本作製するためには、必ずしもすべてが誌上発表されている必要はない。また、1929年はきのこムラージュを四高に導入した市村塘が退官する4年前である。1911年にきのこの掛図を購入して長い間四高の学生にきのこの教育を行って来た市村が、退官間際に1個7円（ペニソウメンタケなど）から15円（マイタケなど）という高価な蠟模型をこれほど多く（備品番号から推定すると42個程度）揃えるだろうか。これ以上の物証はないが、大正の初めて関係者のすべてがまだ比較的若く活動的であった1915年頃と考えたい。

文献

1. 河原栄、佐久間大輔、赤石大輔：四高のキノコ・ムラージュの謎、金沢大学資料館紀要、第6号、9-22、2011
2. 金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアム・プロジェクト：デジタル・アーカイブ、きのこムラージュ標本
http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=18
3. 増加図書目録第貳明治三十七年四月、六門丁類植物
4. 古畑徹、河原栄、佐久間大輔、赤石大輔、堀井雅弘：四高旧蔵のキノコ・ムラージュ標本とキノコの手描き掛図、第6回博物科学会2011年6月24日、名古屋

5. 赤石大輔、河原栄、佐久間大輔、古畑徹：四高時代きこの蠟模型の再発見、日本菌学会第55回大会、2011年9月11日、札幌
6. 小西康太郎編集：食用菌類模型5 種組ワックス製、島津植物学標本目録第800号. p48. 1937.
7. 小西康太郎編集：菌類模型、島津植物学標本目録第20号、19-21、1938
8. 大阪稲垣製作所：博物学一般25号、1939
9. 国立国会図書館：近代デジタルライブラリー、博物学標本目録
<http://kindai.ndl.go.jp/>
10. 島津製作所標本部編：初等教育博物学標本目録、1933
11. 山越工作所：博物学標本目録、1936
12. 日本科学標本協会編：業界の生い立ちと協会25年を顧みて-東京会場、25周年記念誌、pp9-19. 1983
13. Museum of Natural History (La Specola) in the Museum of Florence
http://www.museumsinflorence.com/musei/museum_of_natural_history.html#up
14. 小野友道：日本のムラージュ、日本皮膚科学会雑誌、111 (4). 651-657. 2001
15. Rajiv Joshi: Moulages in dermatology-venereology.History, 76 (4). 434-438. 2010
16. 白崎昭一郎：日本文化との出会い最終回—土肥慶蔵、福井県広報誌「グラフ福井」、430号、pp10-11. 2004
17. 山口英世：皮膚科学の歴史を語る文化財—皮膚病ムラージュの残照、「真菌（カビ）万華鏡」、山口英世著、南山堂、東京、2004
18. 伊藤誠哉著：日本菌類誌、第2巻4号、1955
19. 川村清一著：原色日本菌類図鑑第1-8巻、風間書房、東京. 1954-1955
20. 宇田川俊一編：日本菌学会創立50周年記念—日本菌学史、日本菌学会発行、2006
21. 今関六也、本郷次雄編著：原色日本新菌類図鑑、保育社、東京、1987
22. 伊藤誠哉著：日本菌類誌、第2巻5号、1959
23. 退職者教員履歴書綴、金沢大学資料館所蔵
24. 勝本謙著：日本産菌類集覧、日本菌学会関東支部発行、2010

図の説明

図1. ナラタケのムラージュ. A. 北海道大学. B. 金沢大学. A. Bは酷似。

図2. イロガワリのムラージュ. A. 金沢大学. B. 東京大学. C. 山越工作所の目録の写真. A. B. Cともにほぼ同一。

図3. ベニテングタケ. A. 東京大学. B. 山越工作所の目録の写真. C. 川村清一の描画（原色日本菌類図鑑より）。AとBは互いに似ているが、Cは異なる。

図4. 山越製作所の番号ラベルと名前のラベル. A. 15番、ドクツルタケ *Amanita virosa*. B. 34番、アンズタケ。両方のラベルに黒枠がある。名前は和名と学名が記載されている。

図5. マイタケ. A. 金沢大学. B. 川村清一の描画（原色日本菌類図鑑より）。A. Bはよく似ている。

図6. キヌガサタケ. A. 東京大学. B. 山越工作所の目録. C. 川村清一の描画（原色日本菌類図鑑より）。A. B. Cは互いによく似ている。

| 共通番号 (最古番号) | 備品番号 | 表記名 | 当時の学名 | 川村の 発表年 | 備考 |
|----------------|--------|-------------|-------------------------------|------------|-------|
| 4 | 16ノ7 | アカジカウ | <i>Boletus pachypus</i> | 1908 | ムラージュ |
| 9 | 16ノ38 | ユキワリ | <i>Calocybe gambosa</i> | 1929 | ムラージュ |
| 10 | 26ノ5 | シロシメジ | <i>Tricholoma japonica</i> | 1925 | ムラージュ |
| 13 | 16ノ1 | キツネノタイマツ | <i>Phallus rugulosus</i> | 1930 | |
| 14 | 植16ノ3 | キツネノエフデ | <i>Mutinus bonninenis</i> | 1940 | |
| 15 | 16ノ20 | どくつるだけ | <i>Amanita virosa.</i> | 1912 | ムラージュ |
| 17 | 不明 | イロガハリ | <i>Boletus badius</i> | 1929 | ムラージュ |
| 18 | 16ノ33 | タマゴタケ | <i>Amanita caesarea</i> | 1913 | ムラージュ |
| 19 | 植16ノ27 | ならたけ | <i>Armillaria melea</i> | 1909 | ムラージュ |
| 21 | 26ノ8 | シモフリシメヂ | <i>Tricholoma portentosum</i> | 1925 | ムラージュ |
| 25 | 16ノ42 | アブラシメジ | <i>Cortinarius elatior</i> | 1913 | ムラージュ |
| 26 | 16ノ38 | タマゴテングタケ | <i>Amanita phalloides</i> | 1909 | ムラージュ |
| 28 | 16ノ11 | コベニタケ | <i>Russula fragilis</i> | 1908 | ムラージュ |
| 29 | 16ノ36 | ツチカブリ | <i>Lactarius piperatus</i> | 1908 | ムラージュ |
| 31 | 26ノ6 | ハナホウキタケ | <i>Clavaria Formosa</i> | 1929 | |
| 32 | 16ノ23 | サクラシメジ | <i>Tricholoma Russula</i> | 1913 | ムラージュ |
| 34 | 16ノ32 | アンズタケ | <i>Cantharella cibarius</i> | 1908 | ムラージュ |
| 39 | 16ノ36 | アハタケ | <i>Boletus subtomentosus</i> | | ムラージュ |
| 41 | 16ノ31 | シシタケ | <i>Hydnum imbricatum</i> | 1915 | ムラージュ |
| 42 | 16ノ21 | カキシメヂ | <i>Tricholoma ustale</i> | 1925 | ムラージュ |
| 45 | 16ノ9 | クロカワ | <i>Polyporus leucomelas</i> | 1913 | ムラージュ |
| ■7 | 16ノ40 | エノキタケ | <i>Collybia velutipes</i> | 1914 | ムラージュ |
| 50 | 16ノ24 | オオキツネノチャブクロ | <i>Lycoperdon pyriforme .</i> | 1914 | |
| 51 | 16ノ30 | カノシタ | <i>Hydnum repandum</i> | 1913 | ムラージュ |
| 52 | 16ノ12 | マヒタケ | <i>Polyporus frondosus</i> | 1904 | |
| 53 | 16ノ35 | ヤマブシタケ | <i>Hydnum erinaceus</i> | 1915 | |
| 57 | 16ノ29 | カニノ■■■ | <i>Laternea bicolumnata</i> | 1914 | |
| 不明 | 16ノ34 | ツマミタケ | <i>Lysurus mokusin</i> | 1913 | |
| 不明 | 26ノ2 | ベニソウメンタケ | <i>Clavaria rosea</i> | | |
| 不明 | 16ノ39 | サンゴタケ | <i>Pseudocolus javanicus</i> | 1929 | |
| 不明 | 26ノ9 | アフギタケ | <i>Gomphidius roesus</i> | 1912 | ムラージュ |

表1. 金沢大学の蠟模型のリスト（紀要第6号11頁の表を改変。クロカワの最古番号が変更された。学名は川村清一の図鑑に従い、多くが変更された。川村が最初に誌上発表した年を加えた。蠟模型がムラージュか否かの判定を加えた。）

表2. 山越工作所のきのこの蠟模型の目録

| 商品番号 | 商品名 | | | | |
|------|---------------|-------|-----------------|------|----------|
| | | 2304 | からはつたけ | 2334 | あぶらしめぢ |
| | 毒茸及人ノ嫌厭スル茸ノ群 | 2305 | にがくりたけ | 2335 | ひらたけ |
| 2281 | きてんぐたけ | 無毒茸の群 | | 2336 | しめぢ |
| 2282 | てんぐたけ | 2311 | きそうめんたけ | 2337 | さくらしめぢ |
| 2283 | きぬがさたけ | 2312 | こべにたけ | 2338 | むらさきしめぢ |
| 2284 | くもたけ | 2313 | はなほうきたけ | 2339 | あんずたけ |
| 2285 | きつねの糸ふで | 2314 | ぬめりすぎたけ | 2340 | あわたけ |
| 2286 | きつねのたいまつ | 2315 | あかやまたけ | 2341 | はつたけ |
| 2287 | どくつるたけ | 2316 | おほきつねの ちゃぶくろ | 2342 | あかはつ |
| 2288 | いろがはり | 2317 | きつねの ちゃぶくろ | 2343 | まつたけ |
| 2289 | すっぽんたけ | 2318 | べにそうめんたけ | 2344 | くろかは |
| 2290 | かきしめじ | 食茸の群 | | 2345 | 糸のきたけ |
| 2291 | たまごてんぐたけ | 2321 | うすたけ | 2346 | しょうろ |
| 2292 | つちかぶり | 2322 | あかじかう | 2347 | まひたけ |
| 2293 | べにてんぐたけ | 2323 | あみがさたけ | 2348 | やまぶしたけ |
| 2294 | いっぽんしめぢ | 2324 | しろきくらげ | 2349 | かのした |
| 2295 | こたまごてんぐ たけ | 2325 | しひたけ | 2350 | きくらげ |
| 2296 | ししたけ | 2326 | ゆきわり | 2351 | だいこくしめぢ |
| 2297 | つきよたけ | 2327 | しろしめじ | 2352 | ぬめりあくち |
| 2298 | やなぎたけ | 2328 | あふぎたけ | 2353 | あゐたけ |
| 2299 | さんご(こ)たけ | 2329 | たまごたけ | 2354 | さまつたけ |
| 2300 | つまみたけ | 2330 | くりたけ | 2355 | はらたけ |
| 2301 | かにのつめ | 2331 | ならたけ | 2356 | おにく(ふ)すべ |
| 2302 | どくすぎたけ | 2332 | しもふりしめぢ | 2357 | ふらんすしょうろ |
| 2303 | どくべにたけ | 2333 | きしめぢ | | |



図1

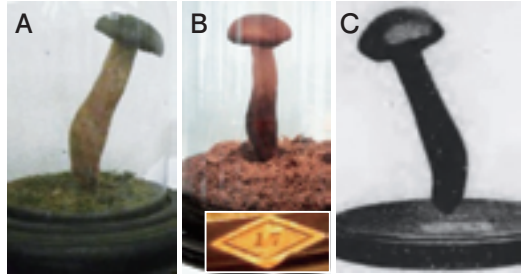


図2

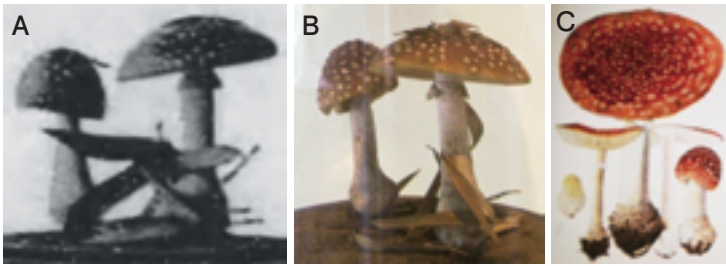


図3



図4

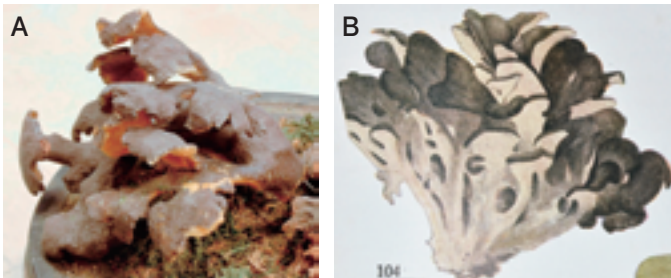


図5

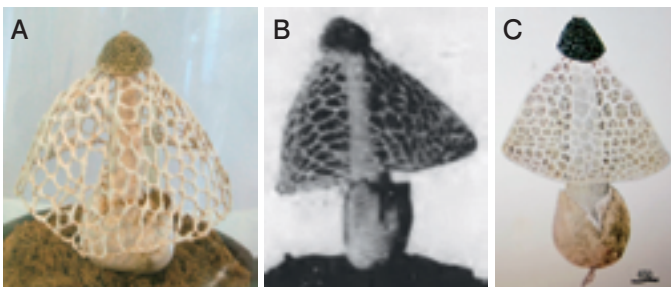


図6